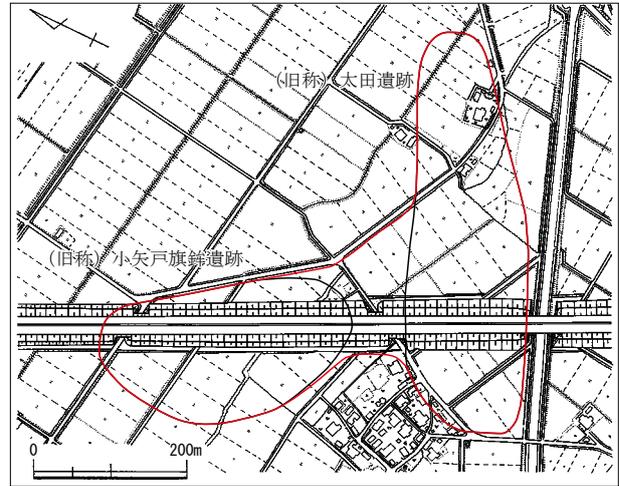


第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯（第1・2図）

太田・小矢戸遺跡は、大野市太田・小矢戸に所在する。昭和62年から福井県教育委員会により、県内の全域にわたる遺跡の分布調査が実施され、「福井県遺跡地図 平成4年度」には「太田遺跡」及び「小矢戸旗鉾遺跡」として周知された。

昭和62年に国の道路審議会の答申により高規格幹線道路網の整備が計画され、福井市から岐阜県内を経て長野県松本市を結ぶ中部縦貫自動車道の整備が具体化し始めた。一般国道158号の自動車専用道路として計画され、総延長は約160kmにおよぶ。県内では、「永平寺大野道路」と称する福井市玄正島町の北陸自動車道福井北インターチェンジから大野市中津川に至る延長26.4kmの区間で事業が着手されることとなった。



第1図 遺跡の位置図（縮尺 1/10,000）

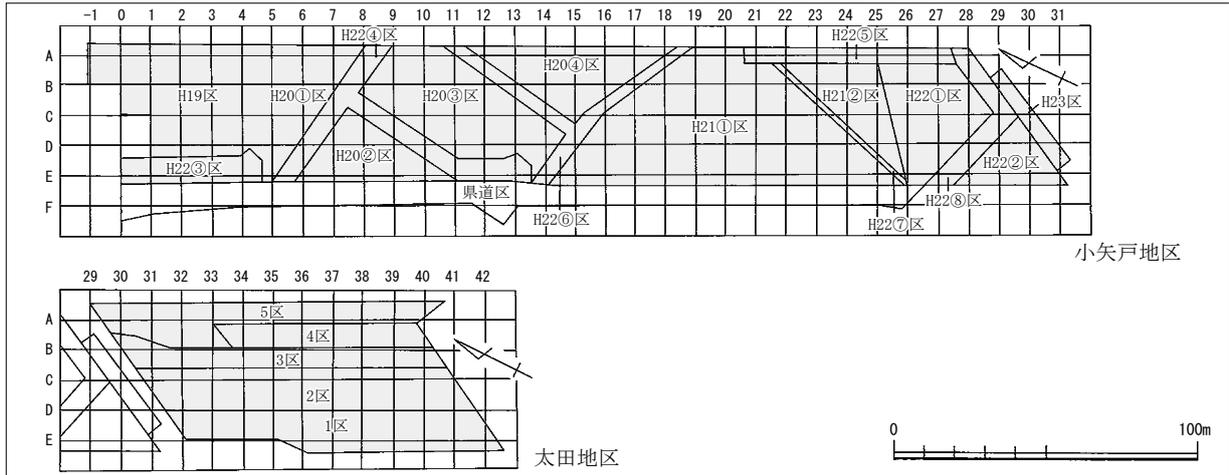
平成元年から福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、埋文センター）により、遺跡の詳細分布調査が実施され、平成6年には「永平寺大野道路」区間の分布状況が一応確定した。その後、中部縦貫自動車道の計画が勝山市から大野市に至る区間で具体化し、路線内に存在する遺跡について範囲の確定と内容の把握が必要となった。

太田・小矢戸遺跡の試掘調査は、平成18年7月25～28日と9月27・28日に埋文センターが実施した。事業予定地内の適所に小矢戸地区34箇所と太田地区17箇所でトレンチを設定し、重機と人力で掘削を行った。調査の結果、遺構は小矢戸地区で溝やピット、太田地区ではピットや旧河道等が検出された。遺物は、両地区とも表土層直下で包含層を確認し、古代の須恵器や土師器が多く出土した。

試掘調査の結果を受けて関係機関と協議を行い、事業予定地内で小矢戸地区の11,000㎡と太田地区の4,500㎡については記録保存のため発掘調査が必要となった。第2図の通りに区割りし、小矢戸地区は北側のH19区、太田地区は西側の1区から順次着手し、小矢戸地区で農道と水路部分のH22③～⑦区は最終年度に実施する計画となった。なお、調査区全体に10m四方のグリッドを設定し、東西はA～F列で南北は-1～42列を配した。グリッドの名称は北西隅の交点で示し、以下「A1」のように表記する。

平成21年に小矢戸地区の調査の過程で、遺跡の範囲がH21②区よりさらに南東へひろがると推察され、B～D25～28列でトレンチによる試掘調査を行った。結果、中世を中心に遺構と遺物の存在を確認し、調査面積が増加することとなった。調査面積は、小矢戸地区が12,800㎡となり、太田地区を含めると計17,300㎡である。当初、小矢戸地区は「小矢戸旗鉾遺跡」、太田地区は「太田遺跡」であり、別の遺跡として把握されていた。調査により、両地区は間断なく続く一連の遺跡であることが判明した。そこで、名称は太田・小矢戸遺跡、範囲は第1図の通りに変更されることとなった。

平成23年にH23区の330㎡で工事立会を実施した。なお、平成21年には、一般県道本郷大野線道路改良工事に伴い、小矢戸地区の西側に隣接する1,810㎡（以下、県道区）で発掘調査を実施した。



第2図 調査区割とグリッド配置図 (縮尺 1/2,500)

第2節 調査の経過

1 小矢戸地区

平成19年度は、10月1日から平成20年3月31日までH19区を調査した。10月前半は、グリッド列に沿ってトレンチを設定して地山まで掘削した。トレンチの断面で土層堆積を観察し、旧地形や包含層、遺構面等の状況を把握した。10月後半から12月は表土とSR02を掘削し、1・2月は冬季のため中断して撤収した。3月前半から調査を再開し、SB01・02・15等の遺構を掘削して記録作業も併行させた。SR02では、縄文時代や弥生時代等の遺物も多く出土し、複数の時期からなることを確認した。

平成20年度は、4月1日から12月26日までH20①～④区を調査した。4月はH20①区でトレンチと表土掘削、及びSB03～07等の遺構を掘削し、記録作業も行った。5月2日にH19区とH20①区で第1回目の航空測量を行い、両区の調査は終了した。5月からH20②区に着手し、トレンチと表土を掘削した。6月前半は、SB08～12やSR01等の遺構を掘削し、記録作業も行った。掘立柱建物は、主に南北方向に棟をもち整然と列状に並んでおり、SR01・02間の微高地で集落が計画的に営まれていたと推察された。6月後半からH20③・④区に着手してトレンチを掘削し、7月から8月は表土と包含層の掘削を行った。9月は、H20④区でSB27～30やSR04等の遺構を掘削して記録作業も行った。10月から11月前半は、H20③区でSB14・17～19やSR01等多くの遺構を掘削して記録作業も行った。遺構は、H20③区ではSR01の南北、H20④区はSR04東側の微高地で3箇所範囲にまとまり、SR01の南側ではさらに集落がひろがると推察された。SR04は、古代の上層段階と弥生時代後期主体の下層段階に区分でき、SR04下層・05埋没後に古代の遺構面が形成されることを確認した。また、SR01・04上層から墨書土器が多く出土した。11月11日にH20②～④区で第2回目の航空測量を行い、11月16日に現地説明会を開催した。12月後半までSR04下層・05を掘削し記録作業も行い、H20②～④区の調査は終了した。

平成21年度は、4月1日から9月30日までH21①・②区を調査した。4月から6月前半はトレンチと包含層を掘削した。6月後半から7月は、SB20～26やSD06～37等多くの遺構を掘削し、記録作業も行った。遺構は、H21①区北西と南側の微高地で2箇所範囲にまとまり、SR01からH21①区北西は古代、南側では主に中世の集落がひろがることを確認した。また、SR04～07は、埋没後に古代や中世の遺構が構築されており、上位の遺構面を測量後に検出することとした。8月7日に航空測量を行い、H21②区の調査は終了した。8月後半から9月は、SR04～07を掘削して記録作業も行い、H21①区の調査も終了した。9月13日に県道区と合同で現地説明会を開催した。

平成22年度は、4月1日から12月28日までH22①～⑧区を調査した。4月は、H22③区でトレンチと表土及びS B16等の遺構を掘削して記録作業も行った。5月から6月前半は、H22①区でトレンチと包含層を掘削した。6月後半は、S B32・35・36等の遺構を掘削し、記録作業も行った。遺構は、H22①区南北の微高地で2箇所範囲にまとめ、南側では再び古代の集落がひろがることを確認した。7月から8月前半は、H22④・⑤区で表土と包含層及びS B08・13・14等の遺構を掘削し、記録作業も行った。8月11日に第1回目の航空測量を実施した。8月後半は、H22⑤区でS R04下層を掘削し、記録作業も行い、H22①・③～⑤区の調査は終了した。9月は、H22②区でトレンチと包含層及びS B37等の遺構を掘削した。10月は、H22⑥・⑦区で包含層とS R01・04上層等を掘削して記録作業も行った。11月5日にH22⑥区で第2回目の航空測量を実施し、11月21日に太田地区と合同で現地説明会を開催した。11月後半までS R04下層・05を掘削して記録作業も行い、H22⑥区の調査は終了した。11月後半は、H22⑧区で包含層とS B34等の遺構を掘削し、記録作業も行った。12月2日にH22②・⑦・⑧区で第3回目の航空測量を行った。12月後半までH22⑦区でS R04下層を掘削し、調査は終了した。

平成23年度は、6月2日から9日までH23区で工事立会を行った。包含層とS B38等の遺構を掘削し記録作業も行った。H22①区南側から続く古代の集落を検出した。

2 太田地区

平成21年度は、10月1日から12月28日まで1・2区を調査した。10月前半は両区でトレンチ掘削、11月前半まで1区の包含層を掘削した。11月後半は、S B39～42等の遺構を掘削して記録作業も行い、11月27日に航空測量を実施した。12月はS R09下層を掘削し記録作業も行い、1区の調査は終了した。また、11月後半から12月は、2区の包含層も掘削した。遺構は、S R09南東側の微高地にまとめ、南西の調査区外へさらに集落がひろがると推察された。

平成22年度は、6月1日から12月28日まで2～5区を調査した。6月から7月前半は、2区でS B43～45・48・49やS R09等の遺構を掘削し、記録作業も行った。7月14日に第1回目の航空測量を行い、2区の調査は終了した。7月後半から8月は、3区でトレンチと包含層を掘削した。また、当初の計画が変更され、5区北端でA29～31の範囲は先行して終了させることとなり、9月から10月前半は3～5区を調査した。3区はS B46・47等の遺構を掘削し記録作業も行った。4区はトレンチと包含層を掘削した。5区北端では、包含層とS D41～44やS R09等の遺構を掘削し、記録作業も行った。10月14日に第2回目の航空測量を行い、3区と5区北端の調査は終了した。時期は7世紀後半から8世紀前半が中心で、小矢戸地区より古い様相をもつと推察された。10月後半は4区で引き続き包含層を掘削し、11月から12月前半は、遺構を掘削し記録作業も行った。5区はトレンチと包含層、及び遺構を掘削して記録作業も行った。12月18日に4・5区で第3回目の航空測量を実施した。12月後半は、S R09下層を掘削し記録作業も行い、4・5区の調査は終了した。

3 遺物整理

遺物整理は平成21年度から開始した。以下、地区別に実施した主な作業について記す。

小矢戸地区は、平成21～23年度に洗浄・注記・接合、同24年度に復元、同24・25年度に実測・トレース及び遺構図のトレースを行った。木製品9点は、同25年度に保存処理と樹種鑑定を外部に委託した。

太田地区は、平成22・23年度に洗浄・注記、同24年度に接合・復元、同25年度に実測・トレース、同26年度に遺構図のトレースを行った。

両地区とも、平成26年度に遺物の写真撮影と原稿の執筆を行い、報告書を作成した。

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境（第3図）

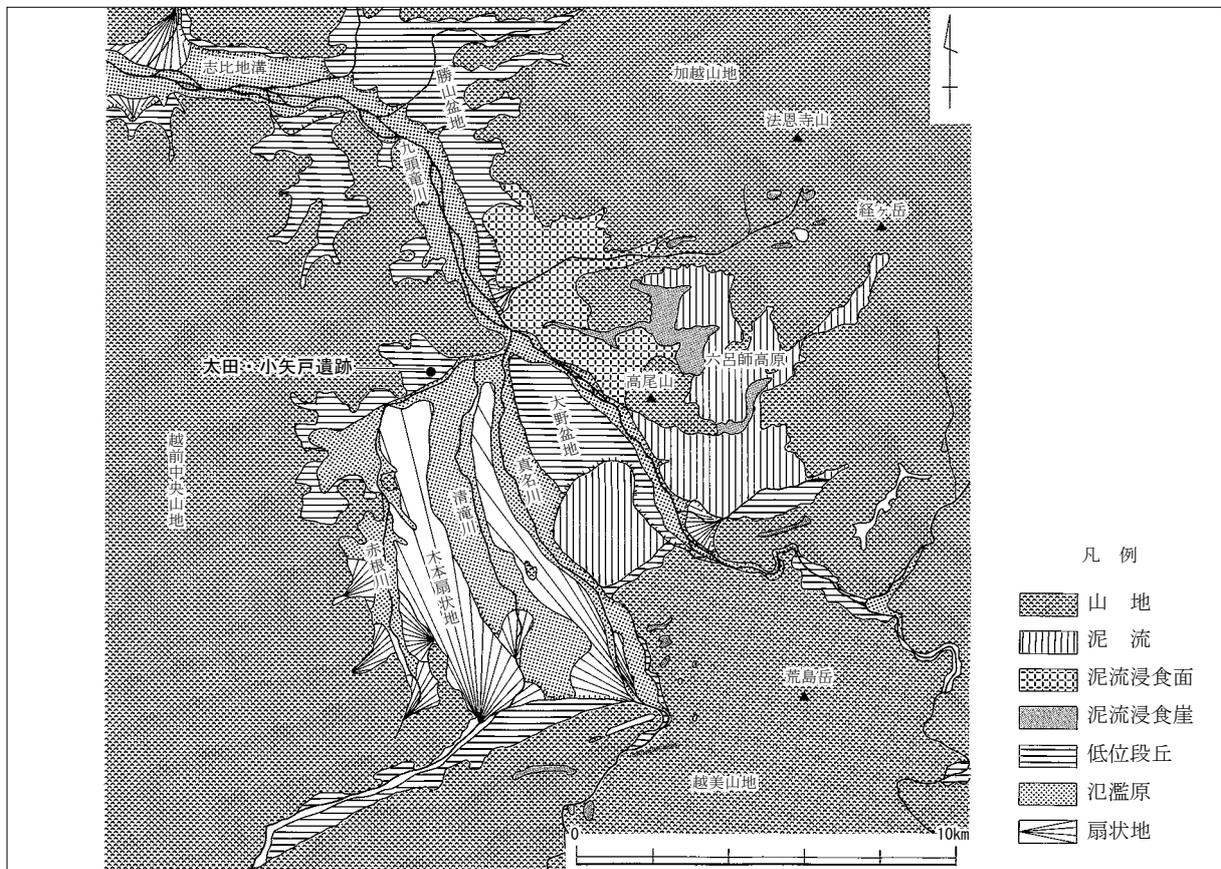
福井県は、敦賀市北東の木ノ芽山嶺を境として、行政的には嶺北と嶺南の各地方に区分されている。嶺北地方は、北を加越山地で石川県、東を越美山地で岐阜県と接し、西に丹生山地があり三方を囲まれ、中央には越前中央山地が南北にのびる。各山地に源をもつ九頭竜川、足羽川、日野川等の主要な河川は、北西へ向けて集まり日本海に流出している。平野の大部分は、主要な河川により形成された沖積平野で、九頭竜川の上流域では大野・勝山両盆地がある。

大野盆地は、周囲を加越・越美・越前中央の各山地に囲まれ、九頭竜川、真名川、清滝川、赤根川の諸河川は南方から盆地内に流入し、北端で九頭竜川へ合流している。盆地は、諸河川が運搬した砂礫と経ヶ岳の火山活動で生じた泥流の埋積により形成されている。

盆地の東部では、九頭竜川がかつて扇状地を形成したとされるが、泥流により失われている。泥流は、高尾山で遮られて六呂師高原、さらに盆地中央まで流出して火山性台地を形成した。九頭竜川は、火山性台地を切断して兩岸に段丘を形成し、真名川と共に近年まで増水の度に氾濫を繰り返していた。

盆地の西部では、清滝川と赤根川の間にも木本扇状地が形成され、扇端で「清水」と呼ばれる伏流水が現在も豊富に湧き出ている。また西端では、大小の丘陵の突出により小盆地状の地形が形成されている。赤根川は、沈降性の山麓に沿って蛇行しながら緩やかに流れ、下流域の所々で滞留し渇を形成していた。

太田・小矢戸遺跡は、大野盆地の北西部に位置し、赤根川下流の左岸で低位段丘上に立地している。



第3図 大野・勝山盆地の地形分類図（縮尺 1/200,000）

第2節 歴史的環境（第4図）

太田・小矢戸遺跡の所在する大野盆地では、これまで縄文時代以降の遺跡が多数確認されている。特に近年は、盆地西部の赤根川流域を中心に真名川流域でも発掘調査例が増加し、縄文時代や弥生時代、古代等で多くの成果が得られている。以下、時代別に主要な遺跡の概要を記す。

縄文時代

主に赤根川流域の丘陵縁辺や扇状地、及び微高地上に立地する。前期から存在し、右近次郎遺跡で土器が出土している。中期から後期では、右近次郎遺跡で石囲い炉や埋甕等が検出され、竪穴住居が13棟存在したと推定されている。土器が多量に出土し、大杉谷式を主体に多数の型式からなり、編年の研究上で重要な資料となっている。石器も石鏃や石匙、打製石斧や磨製石斧、石錘等が多く出土している。下黒谷遺跡では、竪穴住居や土坑等が検出され、土器の他に多数の打製石斧や石棒等が出土している。晩期では、中丁遺跡で土器棺墓が検出され、右近次郎西川遺跡では旧河道から土器が多く出土した。また、縄境遺跡でも土器や石器が出土している。他に時期不詳だが、東稻場古墳群は丘陵上に立地し、墳丘下から土器や石器が出土している。

弥生時代

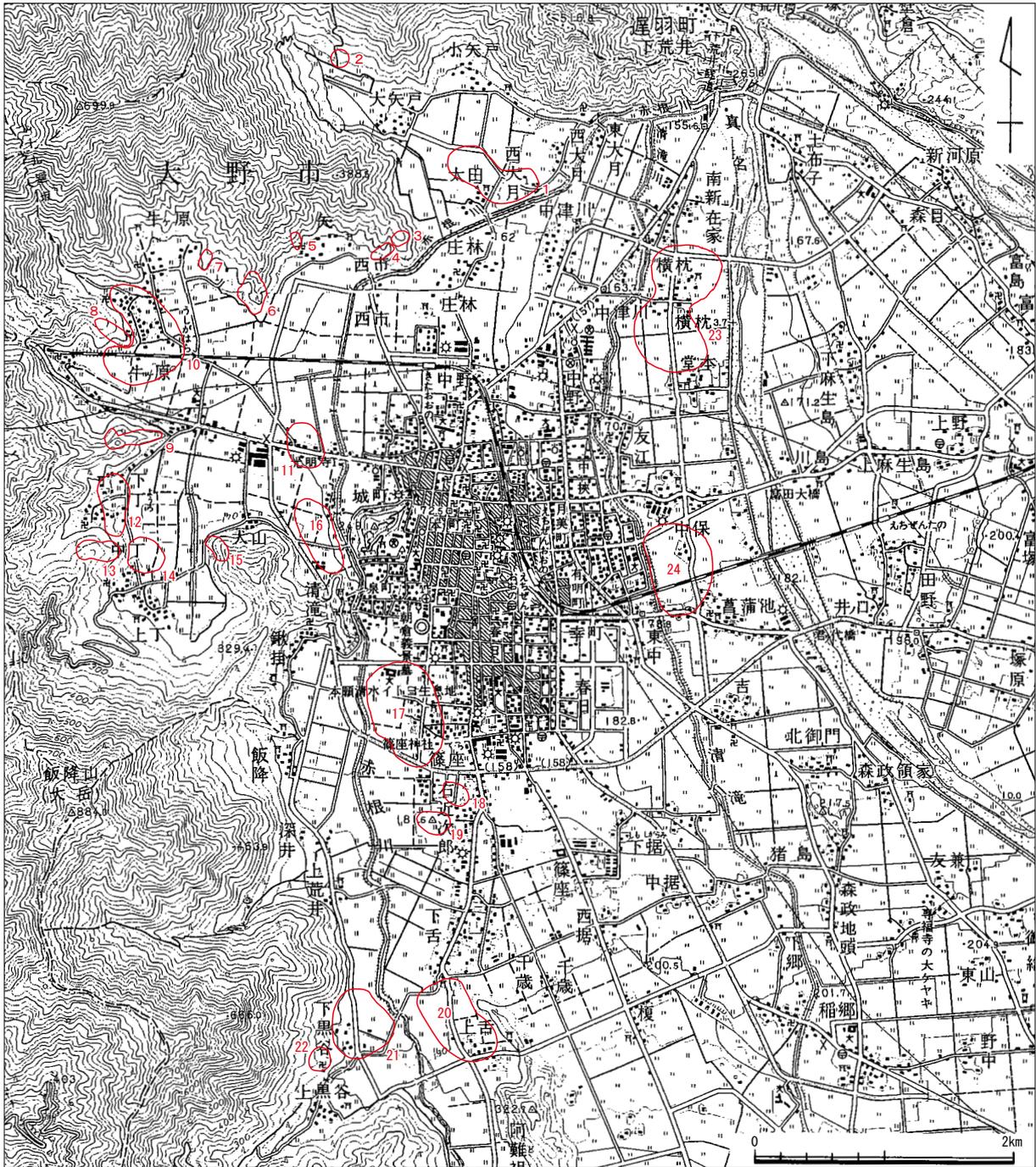
前時代と同様な立地状況だが、遺跡数は後期後半から増加し、古墳時代前期まで継続する例が多くみられる。中丁遺跡では、主に後期の掘立柱建物と溝や土坑が検出され、銅鐸型の長頸壺等の土器が多く出土している。右近次郎西川遺跡では、竪穴住居や掘立柱建物、溝、土坑、旧河道等が検出され、奥越地域で初例となる玉作関係遺物がまとまって出土した。上舌遺跡は竪穴住居や掘立柱建物、下黒谷遺跡は掘立柱建物や溝、横枕遺跡は竪穴住居が検出されている。土器の他、上舌遺跡では打製石斧と鉋や鉄鏃等の金属器、下黒谷遺跡では溝から木製品の鉋、横枕遺跡では多量の打製石斧が出土した。尾永見遺跡や下丁遺跡、新庄遺跡では土坑が検出され、犬山遺跡では溝や旧河道から土器が多く出土した。また、山ヶ鼻古墳群では、後期の方形台状墓が検出され、東海系の土器等が出土している。

古墳時代

赤根川左岸で飯降山支脈の尾根上に古墳群が多く分布している。御茶ヶ端古墳群、目録古墳群、城目古墳群、山ヶ鼻古墳群、東稻場古墳群、稻荷山古墳群、花山古墳群、丁古墳群、犬山古墳群等多く確認されているが、発掘調査例は少ない。山ヶ鼻古墳群の6号墳は、中期の前方後円墳で全長約31mを測る。埋葬施設は割竹形木棺であり、副葬品に鉄剣や鉄鏃等が出土している。大矢戸古墳は、後期の円墳で埋葬施設は横穴式石室である。集落は、大半が小規模だが後期を中心に分布する。新庄遺跡では、掘立柱建物が多数検出され、須恵器や土師器が出土した。また、右近次郎西川遺跡は掘立柱建物や溝、横枕遺跡は竪穴住居が検出されている。他に、中丁遺跡では中期の土器が包含層からまとまって出土し、下黒谷遺跡では銅鏃が出土している。

古代

赤根川流域に加え、真名川流域の扇状地上にも遺跡の分布範囲が広がる。奈良時代から存在し、遺跡数は平安時代前期に増加する。横枕遺跡では、竪穴住居や掘立柱建物、土坑等が多数あり、桁行7間×梁間3間規模の大型掘立柱建物が検出されている。須恵器や土師器が多量に出土し、墨書土器や灰釉陶器、円面硯や八稜鏡も出土している。郷倉等の公的施設があった可能性が指摘され、真名川を介した物資流通に深く関与した集落であったと推察されている。中保小政戸遺跡は、真名川流域に分布し、竪穴住居や掘立柱建物が検出された。下丁遺跡では、掘立柱建物や溝、土坑が検出され、須恵器や土師器の



第4図 周辺の遺跡分布図 (縮尺 1/50,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な時代	種別	文献	番号	遺跡名	主な時代	種別	文献
1	太田・小矢戸遺跡	縄文・弥生・奈良・平安・中世	集落跡	18	13	丁古墳群	古墳	古墳	1・7
2	大矢戸古墳	古墳	古墳	1・7	14	中丁遺跡	縄文・弥生・古墳・中世	集落跡	15
3	御茶ヶ端古墳群	古墳	古墳	1・7	15	犬山古墳群	古墳	古墳	1・7
4	目録古墳群	古墳	古墳	1・7	16	犬山遺跡	弥生	集落跡	8
5	城目古墳群	古墳	古墳	1・7	17	新庄遺跡	弥生・古墳・中世	集落跡	6
6	山ヶ鼻古墳群	弥生・古墳	墳丘墓・古墳	1・4	18	右近次郎遺跡	縄文	集落跡	2・3
7	東稲場古墳群	縄文・古墳	古墳	10・12・13	19	右近次郎西川遺跡	縄文・弥生・古墳・中世	集落跡	14
8	稲荷山古墳群	古墳	古墳	1・7	20	上舌遺跡	弥生・中世	集落跡	17
9	花山古墳群	古墳	古墳	1・7	21	下黒谷遺跡	縄文・弥生・古墳・中世	集落跡	11
10	尾永見遺跡	弥生	集落跡	8・9	22	下黒谷経塚	平安	経塚	5・7
11	縄境遺跡	縄文	集落跡	8	23	横枕遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	集落跡	19
12	下丁遺跡	弥生・平安・中世	集落跡	16	24	中保小政戸遺跡	平安	集落跡	20

他に灰釉陶器も出土した。また、太田集落西方の丘陵縁辺で、平安時代の平瓦が採集されている。他に、下黒谷経塚では、平安時代末で「保元二年」の銘がある経筒や和鏡等が甕から出土している。

中世

集落は、鎌倉時代後期や室町時代後期を中心に分布する。下丁遺跡では掘立柱建物や井戸等、中丁遺跡では土坑が検出され、共に土師質土器皿や越前焼、青磁・白磁等が多く出土した。また、室町時代後期の和鏡が出土している。新庄遺跡と右近次郎西川遺跡では、掘立柱建物や井戸等が検出され、新庄遺跡の建物は鍛冶関連の施設と推定されている。両遺跡とも井戸から漆器椀が出土しており、右近次郎西川遺跡では他に釣瓶桶や杓子も出土している。上舌遺跡では総柱構造の掘立柱建物、下黒谷遺跡では井戸や土坑等が検出されている。

参考文献

- 1 大野市教育委員会 1980 『山ヶ鼻古墳群』 大野市文化財調査報告書 第1冊
- 2 大野市教育委員会 1982 『右近次郎遺跡Ⅰ』 大野市文化財調査報告書 第2冊
- 3 大野市教育委員会 1985 『右近次郎遺跡Ⅱ』 大野市文化財調査報告書 第3冊
- 4 大野市教育委員会 1993 『山ヶ鼻古墳群Ⅱ』 大野市文化財調査報告書 第5冊
- 5 大野市史編さん委員会 1987 『大野市史 図録 文化財編』
- 6 佐々木伸治 1997 『新庄遺跡』 「中・近世の北陸」 北陸中世土器研究会
- 7 福井県大野市 1988 歴史と史跡 大野
- 8 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1995 『尾永見遺跡 下田遺跡 縄境遺跡 犬山遺跡』
福井県埋蔵文化財調査報告第28集
- 9 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1997 『尾永見遺跡Ⅱ』 福井県埋蔵文化財調査報告第37集
- 10 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1997 『第12回発掘調査報告会資料』
- 11 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998 『下黒谷遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第40集
- 12 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998 『第13回発掘調査報告会資料』
- 13 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999 『第14回発掘調査報告会資料』
- 14 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2002 『右近次郎西川遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第58集
- 15 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『中丁遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第64集
- 16 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『下丁遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第74集
- 17 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012 『上舌遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第131集
- 18 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013 『太田・小矢戸遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第142集
- 19 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014 『横枕遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第148集
- 20 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014 『中保小政戸遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第153集

第3章 遺跡の概要

第1節 基本層序（第5図）

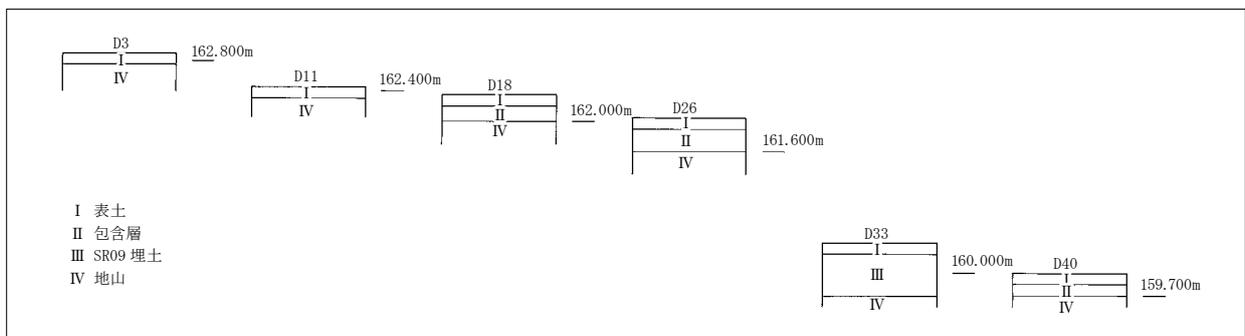
調査区の旧地形は、微高地と旧河道からなる。全体的には、赤根川下流側の南東へ緩やかに傾斜しており、調査区の東西端で比高差は約3.3mとなる。微高地は、小矢戸地区で5箇所、太田地区で2箇所計7箇所あり、旧河道により区分された範囲にひろがる。土層堆積状況は、調査区を南北に横断するよう、D3・11・18・26・33・40の6箇所を示す。

A～F 2～9・10で、SR01・03以北から同02以南にひろがる微高地（以下、微高地01）では、表土、黄褐色土の地山の順で堆積している。後世の耕地整理等による削平が著しく、北半で東西及び南北にのびる近現代の暗渠排水路、中央南側のA～E 6～8の範囲では不整形な土坑状の耕作痕等を多く検出している。本来の包含層や遺構面は遺存せず、SB01～16等の遺構の大半は表土直下の削平面で検出した。また、SB07の南東半は、削平され遺存しない。

C～F 11～18でSR01以南から同04以西の微高地（以下、微高地02）と、A・B 14～20でSR01以南から同04以東の微高地（以下、微高地03）では、H22⑥区を境に土層堆積状況が異なる。H22⑥区は、調査前には農業用水路が設置されていた範囲であり、用水路の南北で棚田状に段を成して耕地整理されていた。北側は微高地01と同様だが、南側では表土、包含層、地山の順で堆積している。地山は、暗黄褐色粘質土で粘性も強くなる。SR04～07が大きく湾曲しつつのびており、低湿な環境に起因すると推察される。また、SR05～07が埋没後に古代のSB24～26・28やSD06～25等が構築されている。

A～F 20～26でSD26以南からSR08以北の微高地（以下、微高地04）と、A～F 27～30でSR08以南から同09以北の微高地（以下、微高地05）では、表土、包含層、地山の順で堆積している。共に地山は黄褐色土だが、基盤に数cm大の小礫や砂粒を含むようになる。微高地04の北端は、微高地02・03の南側と同様な堆積状況であり、SR04・06が埋没後に中世のSD26・27等が構築されている。また、微高地05の南西端では、調査区外へ向け傾斜している。

B～F 36～40でSR10～12に囲まれた微高地（以下、微高地06）と、A35～39でSR11以南から同12以東の微高地（以下、微高地07）は、SR09を境に同05との比高差が約2m弱あり、小矢戸地区と比較して低位の微高地となっている。表土、包含層、地山の順で堆積し、地山は黄褐色粘質土である。基盤に数cm大の小礫や砂粒を多く含み、微高地05の南端では、数cmから10cm大の河原石もみられるようになる。また、微高地07は、大半が調査区の北東方へひろがり、SR11・12の下層段階が埋没後に古代のピット等が構築されている。



第5図 土層柱状模式図

第2節 遺構の構成と分布（第6図）

掘立柱建物49棟、柵列1条、溝93条、井戸14基、土坑41基、土器溜り3箇所、ピット約2,200基の他、旧河道12条からなる。小矢戸地区では、掘立柱建物38棟、柵列1条、溝40条、井戸14基、土坑34基、土器溜り3箇所、ピット約1,500基、旧河道8条がある。太田地区では、掘立柱建物11棟、溝53条、土坑9基、ピット約700基、旧河道4条がある。

遺構は、微高地を中心に小矢戸地区で5箇所、太田地区で2箇所の範囲に分布する。

微高地01では、特に東半でS B 01～14等が集中し、やや離れた西端でもS B 15・16がある。S B 01～14は、大半が南北方向に棟をもち、建て替え等の重複はあるが整然と列状に群在している。A・B 9・10でS D 01とS R 03により方形に区画された範囲では、小形のピットを多数検出した。S E 02・03とS K 07～09はS R 01北側、S K 03・04はS D 01西側にまとまる。また、S E 01・05はC 8、S K 01・02はE 4とF 3で隣在する。

微高地02では、特に南半でS B 20～26やS D 06～24等が集中し、北半でもS B 17～19・27がある。S B 17～26も大半は、S B 01～14と同様に南北方向に棟をもち、整然と列状に群在している。S D 06～24は、等間隔に平行して細長く主に東西方向にのびる。また、S A 01とS D 05は、微高地02のほぼ中央を東西方向にのび、南北で分布状況が異なる。集落内の区画とも考えられる。北半では、S D 03や大形のS E 04、S K 05・06・10、土器溜り01等が疎らに分布している。

微高地03では、調査区外の東方へひろがる。S B 28～30は総柱構造で北半にまとまり、S D 04はほぼ中央を東西方向にのびる。S D 25は、S R 04の東肩から緩く蛇行して南東へ細長くのび、不整な楕円形状のピットが等間隔に群在し、2条の列をなしている。

微高地04では、特に南西半でS B 31やS E 06～13等、南東端でS B 32やS E 14等が集中し、北半でS K 11～24や土器溜り02・03、南端で大形円形状のS D 38等がある。古代の遺構や遺物が少量となり、弥生時代もあるが中世が中心となる。S D 26は、幅広くほぼ直線的に東西にのび、集落境の溝と考えられる。S D 27・30～33・40は、細長くのびており、屋敷地の区画溝とも考えられる。

微高地05では、調査区外の北東方へひろがる。特に東半でS B 33～36・38とS D 41～44、S K 34がまとまり、中央でS D 39、西端でS B 37やS K 31・32等がある。

微高地06では、特に南半でS B 39～45とS D 45～81やS K 35～43等が集中し、北半でもS B 46・47とS D 82～93やS K 44等がある。S B 43～47は、ほぼ東西方向に棟をもち、側柱と総柱の構造で群在している。S D 47～93は、等間隔に平行して細長く主に南北方向にのびる。小矢戸地区の古代の建物群やS D 06～24と方向が異なり、対照的な分布状況である。

微高地07では、ピット等がややまとまり、調査区外の北東方へひろがる。太田地区では、他に北西端のD 31・32でS B 48・49がある。

第3節 遺物の構成と分布

遺物の数量はコンテナで、小矢戸地区が約160箱、太田地区が約30箱あり、計約190箱となる。縄文、弥生、古墳、奈良、平安、鎌倉、室町等の各時代にわたり多種多様な遺物があり、表土や包含層で5割、遺構から2割、旧河道から3割が出土した。なお、土師質の土器は小破片なため、種別が困難な資料は土師質土器の破片とした。主に弥生土器や土師器、中世の土師質土器からなると考えられる。

縄文時代では、土器や石器がある。土器は、主に小破片だがS R 02のB列以東や同04下層の18列以

南で僅かに出土し、他に土版がSR06で1点出土した。石器は、有茎尖頭器や石鎌、石匙、玦状耳飾、磨製石斧、石刀等があり、特にまとまらず散在する。

弥生時代では、中期も僅かにあるが後期を中心に土器が多く出土し、全体の約4割を占める。甕と壺で5割、高坏・器台が4割、鉢等が1割からなる。大半は、SR02の0列以南、同04下層の18列以南、同05や同06の19列以南、同09・11のB列以東、同12の38列以南でまとめ、特にSR04下層と同05・06・09で多量に出土した。他にSK06・44でも出土している。石器は、打製石斧が多くあり、土器と同様な分布状況である。他に石庖丁がSR04で1点出土した。また、玉作関係資料の荒製品もE22の包含層から2点出土している。

古墳時代では、土師器と須恵器があり、全体の約1割を占める。土師器は、中期から後期が中心であり、甕が7割で高坏が3割からなる。大半は、SR04下層の20列以南でまとめ、他に同02・05・06でも出土している。須恵器は後期からなり、坏蓋と坏Hが6割、高坏と甕が4割を占める。SR02の0列以南とB～D26～28の包含層でまとめ、他にSR09・同12の38列以南やSK40・41等でも出土した。

奈良・平安時代では、土師器と須恵器が全体の約4割を占め、他に石製巡方が2点、瓦質土製品の破片、緑釉陶器や灰釉陶器の碗と皿等、木製品も僅かに出土している。土師器は、甕や甑で6割、碗や皿で4割を占め、他に少量だが赤彩土師器や土錘等がある。須恵器は、特に多くの器種からなり、坏蓋と坏A・Bや皿で6割、甕・壺や鉢、瓶類等で4割を占める。墨書土器は200点余りあり、遺跡の性格を示す特徴的な存在である。判読可能な資料には「酒富」・「酒」・「富」が多く、他に「公主」・「戌人」・「人」・「女」・「口吉」・「但波」・「南」・「伊」・「中」・「井口」・「大井」等がある。また、刻書土器や転用硯も数点あり、須恵質の土製品で権状錘がD15の包含層から出土している。SR01の全体にかけて多量に出土し、特にD・E10で集中する。SR02の0列以南、同03のB列以東、土器溜り01、他にSD01・39やSK05・10、SR04上層や同09・10等、及びD・E15～17、B～D27・28、D・E38・39で遺構が集中する範囲の包含層でも多く出土した。また、墨書土器は、SR01で特にまとめ、SB08のP10やSE04、土器溜り01等からも出土している。他に石製巡方は、SB08のP05とSB09のP10で隣在して出土した。瓦質土製品と緑釉陶器の破片はD・E34の包含層、灰釉陶器の碗と皿はSR01・04やE34の包含層から出土している。

中世では、土師質土器と陶磁器が全体の約1割を占め、他に少量だが石製品や銭貨等がある。土師質土器は、鎌倉時代が中心で大半が皿である。特にSK33と土器溜り02・03は、一括して廃棄された状況であり、A～C20～22とA・B25の包含層からも多く出土した。他にSB32周辺のピット等やSE02・03・14、SR01・03等でも出土している。陶磁器は、鎌倉時代から室町時代にかけて、国産陶器や舶来磁器が少量だが多種出土した。国産陶器では、越前焼の甕・壺と片口鉢や播鉢が中心であり、他に常滑焼の壺や山茶碗、古瀬戸製品の折縁深皿と花瓶や卸皿等がある。舶来磁器では、青磁・白磁や染付の碗、青白磁の合子蓋がある。また、石製品は、硯や砥石、粉挽臼、茶臼、バンドコや五輪塔等があり、銭貨は大半が北宋銭である。主にSD01やSR03のC列以東でまとめ、他にSR01のE10周辺やA～C19～21やE・F22の包含層でも出土している。